沓掛良彦
『文酒閑話』（平凡社）
『詩女神（ミューズ）の娘たち
——女性詩人、十七の肖像』（未知谷）

自他ともに認める本学きっての文人である沓掛良彦氏は、昨年四月より本学の初代学部長を務めている。何よりも詩と酒を愛し、東西の詩林を逍遥することに至上の喜びを見出す人物が、学部長というもっとも反・文人的な職を全うしようとするとどのような事態が生起するのかという、貴重な〈人体実験〉を我々は目の当りにしつつ一年近い時間が経過することになった。その諸会議における沓掛氏の手腕が文人らしからぬ着実さを示し、学部運営の長としていささかの停滞を生ぜしめていないのは驚嘆に値するが、モリエールの喜劇の表題をもじっていえば、「いやいやながら学部長にされ」（Le Doyen malgré lui）といったあたりに、氏の真率な思いは存するかもしれない。

少なくとも酒とともにあった師や友人を追憶し、そのなかに醸成されていったかのような文雅の世界への愛着を語る『文酒閑話』の著者が、会議や交渉に忙殺される日々を愛することが少ないであろうという可能性は、その頁を繰りつつ容易に想起されるのである。この随想集で沓掛氏は中村真一郎、寺田透、篠田一士といった敬愛する先達の、言葉の世界を渉猟する知的膂力の大きさを賛嘆しつつ、酒精とともに立ち現れるその人間的滋味の深さを語り、そうした滋味を追放しつつある現在の文学研究の殺伐と、大学の研究室の荒涼を嘆いている。その指弾の筆はしばしば自身にも及び、大学教師として文学に携わることの困難が揶揄のなかに提示されている。けれども氏が嘆くところの力量の乏しさも、中村、寺田、篠田といった稀有の碩学と比較した上での卑下であって、英、仏、伊、露、ギリシャ、ラテンの諸語を征服しつつ、それらの圏域の詩的精華を吟味し、さらにそれを練達の日本語に移植しうる氏の学才は、評者などにとってはひたすら翹望の的でしかない。

その沓掛氏の本来の力量を垣間見るに十分であるのが、氏の編纂による『詩的女神（ミューズ）の娘たち』である。ここではギリシャ・ローマから現代のロシアに至る、遠大な時空の領野に姿を現した十七人の女性詩人たちの表現を、沓掛氏、及び牛島信明、亀山郁夫、和田忠彦という、本学の誇る四教官を含む十四人の研究者が吟味し、その核心へと長駆する精緻な批評が集成されている。その一々を紹介するための紙幅は用意されていないが、総じてここで光を当てられた女性たちは、〈不遇〉な存在としての相貌を帯びているようだ。もともと詩が情念の言葉の織り成す世界であるならば、その情念（パッション）——受苦（パトス）を喚起する状況にいかに自己を横たえるかということが、その成就をもたらす要件となるだろう。あるいは受苦的な状況のなかに生きるきしみが、言葉を操る才覚と結びつくことによって、詩を結晶させるのだともいえるが、それぞれの精華を残した十七人の女性詩人たちは、いずれも愛するものを持ちながら、その相手である恋人や国や、あるいは自分自身との齟齬のなかに生き、そこから表現を生み落としていった人びとである。

たとえば沓掛氏が冒頭に取り上げる、その十七人の「娘たち」の〈長女〉ともいうべきサッフォーは、恋愛を主題とした詩を綴りながらも、残された数少ない詩篇からうかがわれるのは、むしろ恋に捉えられる力を肉体的な次元で感知する受

苦の烈しさである。沓掛氏が謬見として挙げる、美青年への愛が実らずに海に身を投げたという伝も、彼女の担った受苦性が否応なく導き出したものであったのかもしれない。「恋の衝撃」をうたった詩に含まれる、「冷たき汗四肢にながれて、身はすべてふるえわななく。／われ草よりもなお蒼ざめいたれば、／その姿こそ、わが眼にも息絶えたるかと／見えようものを」といった言葉は、その側面を如実に照らし出している。興味深いのは、この「恋」の相手が男性ではなく自分が薫陶を施した少女であったことで、彼女が男性と親しげに言葉を交わすのを目撃した「衝撃」がそのモチーフをなしているという。ここには同性愛的なエロス性の浮上とともに、みずからの分身と見なしていた対象を失う予感がもたらした、内的な崩壊の苦しみが見て取られる。

この情念と受苦の連関はこの書に取り上げられた女性詩人たちの表現のいたるところに見出され、その中心的な興趣をなしている。サッフォーにつづいて沓掛氏が論じる古代ローマの少女スルピキアは、もっぱら異性愛を主題としているものの、やはり彼女にとっても詩は、エロスの牽引によってもたらされた受苦に対する宥和以外ではない。牛島信明氏の論じるサンタ・テレサ・デ・ヘススは、同じく恋の情念に捉えられながら、情念の本来はらむ他者性を神への渇仰へと転じうる詩人であった。引用された彼女の詩に繰り返される「私は死ぬことなく死ぬのである」という文句は、恋の受苦性が同時に彼岸への飛翔の駆動力となる、独自の逆説を示唆していよう。また亀山郁夫氏が取り上げるアンナ・アフマートワにとっては、情念――受苦の対象はむしろ国家であり、抑圧された民衆と正教信者の声を身に受けつつ、我が子を捧げることさえ辞さない覚悟の烈しさのなかで、ロシアの再生を希求する詩を生み出すことになった。一方和田忠彦氏の語るアメーリア・ロッセッリは、何ものかに駆り立てられる情念の担い手としては位置づけられていないものの、英・仏・伊の三つの言語の間を往還しつつ、その危うさと自己の精神の抱えた破綻を照応させる形で、受苦の外化を試みた詩人であった。

こうした女性詩人たちの情念――受苦の諸相が、現実社会において彼女たちに付与されざるをえないジェンダー的な劣位性と連結することはいうまでもない。また多くの女性詩人の主題が恋愛の情念に収斂されていく傾向自体が、彼女たちの自己実現の可能性に対して課された限定と背中合わせであることは自明であろう。けれどもむしろそれゆえに、受苦によって駆動力を与えられた彼女たちの情念は、言葉を媒介として求心的な密度を高め、詩という結晶をもたらしていくのである。

抒情詩の本質を、自己と表現の対象である外部世界との「透入」に見出したのはエミール・シュタイガーだが、この書に盛られた詩の主である女性たちの多くは、こうした見解の妥当性を相対化する烈しさを示している。彼女たちは対象に気分的に透入するよりも、より直截に対象との合一に惹かれるのであり、その合一が成就しえない受苦を慰撫すべく、言葉を導き寄せている。「選ばれた魂の叫び」（金子美都子「マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール夫人」）、「何よりも自分の魂を重んじた」（植松みどり「エミリ・ブロンテ」）といった引用、記述にも見られるように、詩の根底にあるものが何よりも、きしみのなかで言葉を放射しつつ烈しく自転する魂であることを、読む者にあらためて告げているのがこの書であるといえよう。

（柴田勝二）